

# 日本靴医学会の歩みと今後の課題

日本靴医学会理事長

井口 傑

20周年記念特別講演

日本靴医学会の歩みと今後の課題

日本靴医学会理事長  
井口 傑

大久保会長から、第20回日本靴医学会を記念して「日本靴医学会の歩みと今後の課題」と題して講演するように依頼されました。多くの先達を差しおいて、私にこれを語る資格があるとは思いませんが、理事長という職責に命じられた物とお引き受けしました。そこで、まずは本来この講演をするべき日本靴医学会創立当時の役員をご紹介します。創立時の理事長は鈴木良平先生、理事は石塚忠雄、荻原一輝、加倉井周一、桜井実、中嶋寛之の各先生方、評議員は明石謙、安積和夫、阿曾沼要、安達長夫、新垣敏雄、石井清一、岩倉博光、上野博嗣、大庭健、加藤正、加藤宏、金井司郎、小山由喜、佐藤安正、佐野精司、首藤貴、高橋公、高山榮、田村清、松崎昭夫、三好邦達、横江清司、吉峰泰夫の各先生方と多くの先生が参加されました。歴代の理事長(表1)、学会長(表2)をまとめて、ご紹介します。

靴医学は世界的に見ても類を見ない特異な学問です。従って、和英辞典を引いても「靴医学」に相当する単語はありません。会則に定められた「日本靴医学会」の英訳は“The Japanese Society for Medical Study of Footwear”ですから、「靴医学」は“Medical Study of Footwear”と言うことになります。逆に和訳すると「履物の医学的研究」となり、「靴医学」とはニュアンスの違いを感じます。機関誌である「靴の医学」の英訳は会則に規定されていないので、問い合わせがあった場合には、“kutsunoigaku”または“Journal of Japanese Society for Medical Study of Footwear”と答えています。

表1. 歴代日本靴医学会理事長

鈴木 良平	昭和62年～平成6年
佐野 精司	平成7年～平成11年
松崎 昭夫	平成12年～平成13年
高倉 義典	平成14年～平成16年
井口 傑	平成17年～

すが、何れもしっくりしません。そこで、先達達が何を「靴医学」と考えたか考えてみました。会則の第2条には「本会は、靴の医学的知識と技術の進歩、普及をはかり、学術文化の向上に寄与することを目的とする」とあります。また、第3条にはその具体的事業として「1. 学術集会および講習会などの開催、2. 会誌・図書などの発行、3. その他、本会の目的達成に必要な事業」とあり、「靴医学」とは「靴の医学的な知識と技術」を想定していたと思われます。しかし、これでは何故「靴医学」と言う新しい言葉を造語してまでも活動をはじめた必要があったのか解りません。

しかし、この疑問を解かねば、世界に類のない「靴医学」を語ることはできません。これを理解するために少々長くなりますが、「靴の医学」第1巻の初代理事長鈴木良平先生の巻頭言を紹介します。

「わが国においては、軍靴からはじまって、現代の紳士靴に至るまで、男性用の靴には、100年を越す歴史があるが、大部分の女性が靴を常用するようになったのは、第2次大戦以降であり、欧米に比べると、その歴史は極めて浅い。しかも急速な生活の洋風化、女性の著しい職場進出に伴って、婦人靴は広範に普及し、日本古来の履物を完全に近いまでに駆逐してしまった。生活水準の向上とともに、とくに女性にとっては、靴はおしゃれの対象となり、商業ペースに乗せられて、足の健康

(2007/02/02 受付)

連絡先: 井口 傑 〒160-8582 東京都新宿区信濃町  
35 慶應義塾大学医学部総合医科学研究センター  
TEL 03-5363-3812 FAX 03-3353-6597

表 2. 日本靴医学会 学術集会歴代会長

第 1 回 (1987 年)	東 京	鈴木 良平	(長崎大学整形外科)
第 2 回 (1988 年)	東 京	石塚 忠雄	(城南病院)
第 3 回 (1989 年)	東 京	中嶋 寛之	(東京大学教育学部)
第 4 回 (1990 年)	仙 台	桜井 実	(東北大学整形外科)
第 5 回 (1991 年)	大 阪	島津 晃	(大阪市立大学整形外科)
		城戸 正博	(大阪市立大学整形外科)
第 6 回 (1992 年)	東 京	加倉井周一	(東京大学リハビリテーション部)
第 7 回 (1993 年)	東 京	佐野 精司	(日本大学整形外科)
第 8 回 (1994 年)	札 幌	石井 清一	(札幌医科大学整形外科)
第 9 回 (1995 年)	福 岡	松崎 昭夫	(福岡大学筑紫病院整形外科)
第 10 回 (1996 年)	神 戸	萩原 一輝	(萩原みさき病院)
		田村 清	(神戸市立中央市民病院)
第 11 回 (1997 年)	東 京	加藤 正	(聖テレジア病院)
		加藤 哲也	(国立東京第二病院)
第 12 回 (1998 年)	名古屋	小林 一敏	(中京大学体育学部)
		横江 清司	(スポーツ医・科学研究所)
第 13 回 (1999 年)	東 京	井口 傑	(慶應義塾大学整形外科)
第 14 回 (2000 年)	長 崎	寺本 司	(長崎友愛病院)
第 15 回 (2001 年)	さいたま	佐藤 雅人	(埼玉県立小児医療センター)
第 16 回 (2002 年)	仙 台	高橋 公	(高橋整形外科)
第 17 回 (2003 年)	奈 良	高倉 義典	(奈良県立医科大学整形外科)
第 18 回 (2004 年)	松 山	山本 晴康	(愛媛大学整形外科)
第 19 回 (2005 年)	東 京	宇佐見則夫	(至誠会第二病院整形外科)
第 20 回 (2006 年)	大 津	大久保 衛	(びわこ成蹊スポーツ大学)
第 21 回 (2007 年)	大 阪	木下 光雄	(大阪医科大学)

を考えずに、ファッションのみで選択するような風潮が一般的となった。そのため足の痛みや変形を生じて、整形外科を訪れる患者が増加している。一方、最近のスポーツブームで、不適当なスポーツシューズで、足のみならず、膝や股関節を痛める患者も激増している。わが国の整形外科医も、ここに至って靴に重大な関心を示さざるをえず、一方業者も今までのファッション重視の営業方針に対する反省から、足の健康を守り、病的な足に対する靴をつくることを考えるようになってきたことは大きな進歩である。このような医師の自覚と、大衆の要求を満たすために、同志相集い、日本靴医学研究会を設立するに至った。今まで何回か靴の専門家による講演会を開催して、熱心な参会者をえて自信を深め、第 1 回研究会を、不肖私が会長となって、1987 年 10 月 18 日、東京虎の門発明会館ホールで開催した。研究会が近づくにつれ、医師以外にも、多くの方々から問合せがあり、

マスコミも強い関心を示すようになったので、会場の狭さが心配になってきた。果せるかな、当日は椅子席は満員となり、後方に立ったまま熱心に耳を傾けておられる方々も少なくなかった。あらかじめ、どのくらい演題が集るかも見当がつかず、参加者もせいぜい 100 名程度と予想していた私には、小さな会場を借りたことが後悔されたが、主催者側にとっては嬉しい誤算であった。考えてみれば、靴を古くから常用している欧米では、一般大衆の靴に対する関心が極めて高く、医師もパラメディカルスタッフや製靴業者と共同して、健康靴や整形外科靴の研究、開発に熱心に取り組んでいるのは、当然であるが、わが国ではまだ医師自身の関心も薄く、研究会の発足は遅きに失した観さえある。これだけ大衆の関心を集めて発足したのであるから、われわれはこの研究会を大切に育成し、発展させて行かねばならぬ責任の重大さを感じるのである。今回は幸い変化に富んだ 16 の一

表 3

目次	
会長挨拶	鈴木 良平
[論文]	
1. 実験靴装着時の足内側アーチの変化について	寺本 司・他 1
2. PLANTER ANALYSERによる足底部の面積と動揺に関する研究	石塚 忠雄 4
3. CPの装具療法	石田 和宏・他 8
4. 歩行開始期の靴について	佐藤 雅人・他 13
5. 整形外科医の考えを取り入れた新しい婦人靴の開発について	中嶋 寛之・他 15
6. 看護婦の足部愁訴と履物の調査	鈴木 精・他 18
7. 当院におけるナースシューズの現状調査	木村 敏信・他 21
8. 外反母趾有病率調査	丸山 政昭 25
9. 外反母趾を主訴としない外反母趾	萩原 一輝 29
10. 足の変形に優しい靴の開発	竹田 宣弘 30
11. 前足部の型と靴	加藤 正 34
12. 新しい外反母趾装具について	星野 達・他 37
13. シューズから見たランニング障害	横江 清司 39
14. スポーツ選手の扁平足障害におけるアーチサポートの評価について	都留 隆行・他 42
15. スキー靴の変遷とスキー外傷との関連について	竹政 敏彦・他 47
16. 逆ヒールの検討	加藤 哲也・他 50
[特別講演]	
1. 靴の上学的評価	山崎 信寿 54
2. 足と靴の関係	近藤 四郎 62
編集後記	石塚 忠雄 68

般演題と、医師以外の靴の専門家による特別講演2題を興味深く聴くことができ、研究会の前途に明るい道が拓けたように思う。今後はよい靴を製作する基礎になる足や起立、歩行の研究、とくにバイオメカニクスの基礎的研究、従来の和風の履物の見直しなども含めて、足の健康を守るばかりでなく、これを増進し、病的な足にいかに対処するかという問題、スポーツシューズ、小児靴なども巾広くとり上げて行き、本研究会が国民の健康と福祉に貢献することを願って止まない。」

靴の医学第1巻の目次(表3)を見れば、創立当時の先達達の意気と周りの熱気が伝わってきます。

当初より、靴の医学的知識の普及には力が入られ、多くのテーマで一般公開講座(表4)が開かれました。また、各時代の靴医学に関する要求を学術会長が取り入れ、各界の権威による特別講演、研修講演(表5)が行われてきました。

その結果として、多くの熱心な会員の努力により、世界に類を見ない特異な学域とも言える靴医

表 4. 一般公開講座

第8回	靴と足の病気
第9回	靴と身体の間わり
第10回	良い靴を履きましょう
第11回	靴と外反母趾
第12回	スポーツシューズを考える
第14回	足の健康と履物 in 長崎
第15回	足の健康と靴
第16回	医科学の研究成果を生かした楽しいウォーキング
第17回	関節リウマチと足の健康
第18回	正しい靴の選び方
第19回	スポーツ現場で生じる障害と靴—理想の靴とは?—
第20回	健康靴の選び方 金メダルの靴づくり

学は徐々にその概念を固めると共に、医療関係者のみならず多くの領域の研究者を糾合集約的な学問体系として確立していったと言えます。

創立20周年を記念して、全ての「靴医学会抄録集」と「靴の医学」をCD-ROM化して会員に頒布いたしました。これを見ていくと、全ての分野、

表 5. 特別講演, 研修講演

第 1 回	靴の工学的評価 足と靴の関係	山崎 信寿 近藤 四郎
第 2 回	着地動作の滑りと衝撃 足の障害とその役割	小林 一敏 William A. ROSSI P. R. Cavanagh
第 3 回	Frontiers in the Science of Shoe Design 靴の科学における開拓者	L. D. Lutter
第 4 回	Non surgical treatment of foot disorders	小林 一敏
第 5 回	滑りと緩衝およびフィット性の評価	潮田 鐵雄
第 6 回	我が国の履物の歴史と今後の課題 — Foot Gear について—	高倉 義典
第 7 回	靴とスポーツ傷害 外反母趾 (RA 趾も含む) と靴	石塚 忠雄
第 9 回	Der diabetische Fuss, conservative, operative und orthopadische schuhtechnische Versorgung (糖尿病病足の保存的, 観血的及び整形外科的靴による管理)	G. Neff
第 10 回	医師のための靴の話 靴を作る 整形外来における足底挿板治療	熊谷 温生 高倉 義典
第 11 回	靴の材料について	大澤 宏
第 12 回	二足性を支える足 —その進化と生体機構—	岡田 守彦
第 13 回	靴を測る・足を測る 足の外科医に必要な靴の基礎知識 靴医学を志す人のための足の解剖と生理	堀内 敏夫 石塚 忠雄 星野 達
第 14 回	足部形態の変異 日本の履物の歴史	河内まき子 千葉 剛次
第 15 回	足袋の歴史と行田足袋 直立二足歩行の獲得から靴まで	斎藤 国夫 鈴木 良平
第 16 回	俗事例をとらえてみる東北地方の履き物 —仙台地方を中心として— 足に多い皮膚疾患, 靴で生じやすい疾患 人間と履物の歴史的考察	中富 洋 牧野 好夫 桜井 実
第 17 回	人類 600 万年の足の進化 スポーツ障害と靴 足装具の処方ポイント	中務 真人 横江 清司 加藤 哲也
第 18 回	理想の靴を求めて —運動靴からの展開— 下肢障害に対する足底挿板療法 靴と歩行分析	大久保 衛 内田 俊彦 寺本 司
第 19 回	糖尿病足の病態と治療 外反母趾の病態 —予防は可能か—	内村 功 山本 晴康

全てのテーマが語り尽くされてしまった感があり、「靴医学の今後の課題」として語れることは無いかのように思えます。しかし、同じテーマであっても時代が変われば技術の進歩, 社会の変化によるニーズの変化により研究の必要は無くなることはありません。山を一越えすれば又一山で、大げさに言えば真理の追究に限りはありません。

この観点から見れば、温故知新と言いますか、先達達の出発点に戻って、新たな展開を考える必要があります。靴医学の出発点とは靴と足です。産業革命以降この数百年に急速に社会に浸透し一般化した靴と、300 万年とも 600 万年とも言われる

直立 2 足歩行による足の進化の歴史との出会いが靴医学の出発点と言えます。靴は足と大地のインターフェースであり、足の保護と能力の向上を目指す物でした。産業革命で靴が最初に一般庶民にまで普及した英国では、「靴も買えない貧乏人」と言う言葉がある如く、当時の馬車優先の石畳の硬さ冷たさ、下水代わりの不潔なぬかるみから足を護り、安楽な歩行を保証する物でした。ところが、靴が一般に普及し、幼い頃から一日中靴を履いて生活するようになると、足の能力、耐久性は急速に低下する一方で、靴のファッション化による弊害が目立つようになってきました。外反母趾や糖

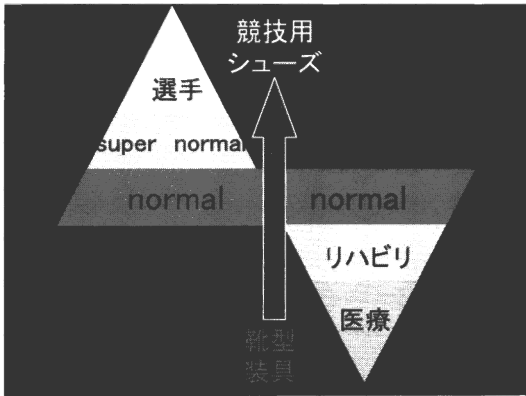


図 1

糖尿病に代表される靴の障害による足の疾患が急増しています。

一方で、人間の生活の質に対する要求は高まる一方であり、人間の動物としての本能から、より速く、より高く、より遠くへと言う要求は、スポーツとして多くの人にとって欠くべからざる物となっています。今まで、病人から健康人へ靴型装具を通じてリハビリに貢献し、その一翼を担ってきた靴医学も、健康人からスーパー健康人、スポーツ選手へとより高い生活の質を求める現代人に、より高度の能力の獲得、より激しい活動からの足の保護と厳しい要求を突きつけられています。(図1)

より良い靴は、ややもすると足を弱くすると言うジレンマをかかえながら、時代の要求に即した靴を、人間の足の面から追求していく課題は尽きないと言えます。